室矢 英樹　記者のページ

最期の備え　変わる葬送

家族にみとられ、友人、知人に手を合わせてもらって、あの世へ旅立つ。命日や彼岸には、墓参りをしてくれる人がいる。そんな弔いをしてもらえる人は幸せかもしれない。これまでと異なる葬送を手がける寺院と墓所を訪ねた。

（室矢英樹）

遺骨葬

参列者はきょうだい2人

北摂の山あいにある天台宗の神峯山寺（高槻市原）に昨年暮れ、男性2人が訪れた。「よろしくお願いします」。宮本乗照執事長(63)に手渡された骨箱が阿弥陀如来像の前に置かれ、お経が読まれた。参列者2人の「遺骨葬」だ。

男性2人は5人きょうだいの長男(75)と三男(67)。遺骨は長女のものだった。1時間ほどの葬儀を終えると、東京都大田区に住む三男は「これで肩の荷が下りた」とホッとした表情を浮かべた。

長女は母方の実家がある青森市内の施設に身を寄せていた。2016年春、心不全で67歳で息を引き取った。両親は他界し、長女は独身で子もいなかった。

施設側がきょうだいに連絡を取ったが、誰ともつながらなかった。仕方なく火葬し、後日、ようやく所在がわかった三男に遺骨を引き渡した。

三男は途方に暮れた。ほかのきょうだいの連絡先すら知らない。三男は自宅のアパートに骨箱をしまい、弁護士を頼った。豊中市に住む長男の連絡先がわかったのは、長女の死から1年近くたった昨年春のことだ。

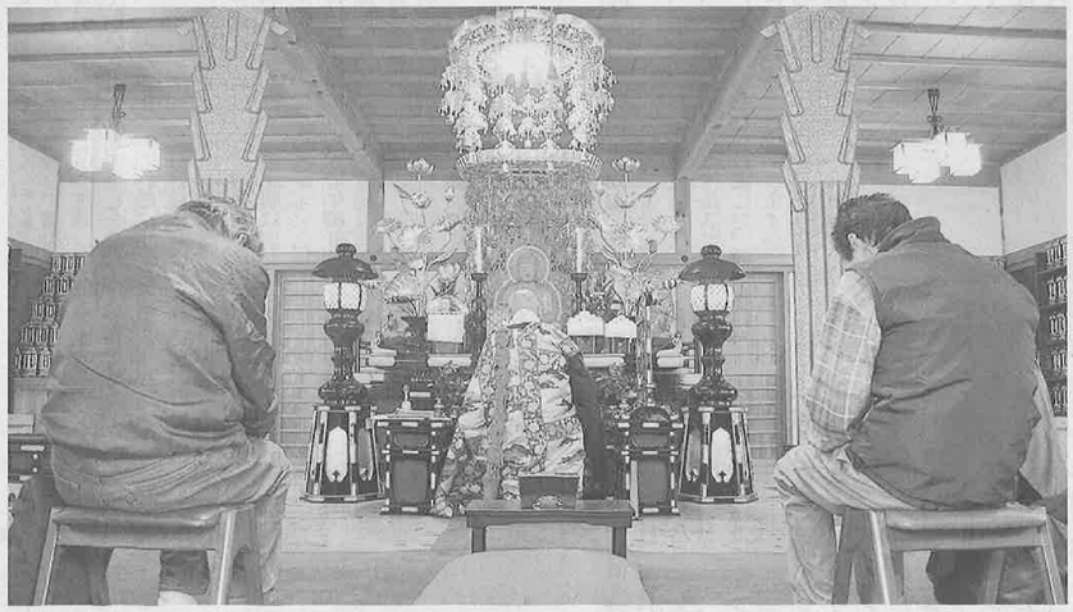
「どうしようか」。久しぶりに声を聞いた三男の相談に、長男は悩んだ。父方の墓は岡山県にあるが、長く墓参りをしていない。自らも高齢になり、墓じまいを考えていた。15年ほど前に母が亡くなったとき、神峯山寺に相談したことを思い出した。

神峯山寺は昨年4月から遺骨葬を始めていた。経費は25万円。戒名もつく。宗派を問わず、だれでも受け入れると説明された。長男は遺骨葬を依頼した。

遺骨葬の後、長男は「自分が情けない」と何度も口にした。所帯を持ち、きょうだいとの交流が面倒だと遠ざけていた。「身内なのに死んだことすら知らなかった。生きているうちに、もっと兄らしいことができなかったか」

独り身の三男は「家族に見送られ、同じ墓に入る。そんな死に方ができる人は幸せ。自分の最期を選べない人は今後増えてくると思う。私もどうなるかわからない」と話した。

長女の遺骨は、お骨で仏像を造ることで知られる浄土宗の一心寺（大阪市天王寺区）に納めるという。



遺骨葬で手を合わせる兄弟。参列者は2人だった＝高槻市原

樹木葬

桜が墓標　石の下に遺骨

神峯山寺の境内に「桜葬」と書かれたチラシが置いてあり、その場所を訪ねてみた。寺から山道を車でのぼり、数分ほどで日当たりのいい傾斜地が見えた。

桜の苗木が植えられた斜面に、10センチ四方の御影石が並んでいた。石の銘板には「お先に失礼します」「お参りありがとう」などと、故人らのメッセージが刻まれていた。

この墓地は、認定NPO法人「エンディングセンター」（東京）が2012年に開設した。墓石はなく、桜の木を墓標とする樹木葬だ。約2300区画のうち、これまでに約480区画で契約が成立。約290人の遺骨が地中に納められている。本人のほか、親のためにと契約する人もおり、契約者の年齢は38～95歳と幅広い。

会員制で年会費は5千円。使用料は1人40万円で、夫婦ら2人の遺骨を納める場合は60万円。埋葬後の管理費はかからない。希望すればペットの遺骨と一緒に納めるエリアもある。

年明け、高槻市に住む男性(72)が見学に来た。先祖の墓は宮崎市内。結婚した2人の娘は府内で暮らしている。「墓があっても墓参りしてくれなければ意味がない。ここなら近くていい」。妻(70)に相談してみるという。

このNPOは、遺影の撮影会や遺品整理を紹介する講座なども開いている。生前に「墓友」をつくろうという試みだ。理事長を務める井上治代・元東洋大教授（社会学）は「戦後長く続いた家族のかたちが変容している。血縁に頼れない人たちをつなぐ『結縁』を手助けしたい」と話す。

桜葬の墓地を見学する男性。御影石の下に遺骨が納められている＝高槻市原

墓が遠い・建てる余裕ない――ロッカー型納骨堂や「骨仏」

墓が遠い、墓を建てる余裕がない、などと困る人たちが注目する動きはほかにもある。

高野山真言宗「常光円満寺」（吹田市）は昨春、4階建ての舎利殿を建設。3階に計240柱の遺骨を納められる仏壇型とロッカー型の納骨堂を用意したところ、約70件の申し込みがあった。JR吹田駅から近く、仕事帰りに寄る遺族も多い。

浄土宗の一心寺は昨年5月末、遺骨で阿弥陀如来像をつくる「骨仏」の開眼法要が営まれた。10年おきにつくられる骨仏には今回、過去最多の約22万3千人の遺骨が納められた。

「2025年問題」多死社会へ

社会問題の研究者の間で注目されているのが「2025年問題」だ。

国立社会保障・人口問題研究所によると、25年は団塊世代（1947～49年生まれ）が75歳以上の後期高齢者になる。年間死亡者は神戸市の人口に匹敵する約152万人（推計）に達し、日本は本格的な「多死社会」に突入する。

一方、15年の国勢調査では、50歳の時点で一度も結婚していない人の割合（生涯未婚率）は、男性が23.4%、女性が14.1%。65歳以上の単身世帯は全国で約593万世帯にのぼった。

人生の最期をどう迎えるか。単身者が増えるなかで、葬送のあり方も変化の波が押し寄せている。

取材後記

死後にどう備えるのか。つくづく家族の間で話すことの必要性を感じた。

核家族社会の先頭を走ってきた世代も高齢になり、人生の最終コーナーに差し掛かっている。古里を離れて暮らしてきた人たちにとって、葬儀やお墓は実に悩ましい問題だ。人が亡くなると、遺品や遺産の整理、空き家の処分、クレジットカードや携帯電話の解約などさまざまな手間もかかる。

今回の取材で「子どもや孫に迷惑をかけたくない」「きょうだいとは疎遠」という声を何人もの高齢者から聞いた。亡くなることを前提にした話は「縁起でもない」と、家族に切り出しにくいテーマかもしれない。しかし、意思を伝えずに息を引き取れば、残された家族は戸惑う。

少子化や生涯未婚率の高まりで、家族の構成人数が少なくなっている。生前、それも元気なうちに死後に備える――。多死社会を迎えるなかで、高齢者に求められている問題だと思った。

お寺の役割「家族つなげる接着剤」　神峯山寺・近藤真道住職(69)

これまでに5件の遺骨葬を挙げました。家族の折り合いが悪い、生涯独身、経済的に苦しいといった理由で葬儀を挙げてもらえなかった人たちです。

家族に見送ってもらい、先祖代々の墓に入る。そんな最期を迎えられない人が多くなっています。近年、通夜や告別式を経ずに火葬する「直葬」が増えています。自治体が火葬し、引き取り手のない遺骨を保管するケースも多くなっている。一方で自分の親やきょうだいの葬儀を挙げなかったことに一種の罪悪感を持つ人がいるのも事実です。

遺骨葬を始めたのは、ご遺体がなくても、故人を弔い、しのぶ場所をつくりたいと考えたからです。

戦前、戦中に生まれた人たちは核家族を形作ってきた世代。親と離れて暮らすのが当たり前になり、近年は一度も結婚せず、家族を持たない高齢者も増えている。家族という単位がますます最小化に向かっていると実感しています。

私の寺では、葬儀をしたり、墓参りをしたりした家族の写真を撮り、会話内容も含めてパソコンに入力し、保存しています。個人情報ですので、外部とのアクセスを遮断しています。亡き祖父母や両親が生前、幼い自分にどう接し、話していたのか。家族間の交流が減ったとしても、寺に来れば自分の家族を知ることができます。

いま、お寺に求められているのは、家族をつなげる接着剤の役割だと思っています。遺骨葬も、そうした取り組みの一つであり、故人を弔う葬儀のかたちに過ぎません。